
とある大将の証言

通信参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある大将の証言

【Nコード】

N3073R

【作者名】

通信参謀

【あらすじ】

一九四四年九月、トリビューン紙は、ブリタニア連邦空軍トレヴァー・マロニー大将への独占取材に成功していた。

そこで本人の口から、ウォーロック、コアコントロールシステム開発の経緯と本当の目的を告げられた。

これはトリビューン紙のマロニー大将への取材の記録である。

一九四四年九月末、我がトリビューン紙は、失脚し、軍事法廷に立たされる直前のトレヴァー・マロニー大将と接触し、独占インタビューに成功していた。

インタビューの記録は当初、軍の検閲を受け機密とされ公開を禁止されていた。

しかし事件から半世紀が過ぎた今、機密解除を受け、ここに公開する物である。

「まず言っておきたいことは、私は、ウォーロックの開発が、戦後に我が国が世界のイニシアチブを握るためには、ぜひ必要だと思っていることです。どんな兵器にも初期不良は付き物です、どうか、私がいかなる判決を受けようと、ウォーロックの開発は継続してほしい。」

イニシアチブを握るのに必要だと言う理由？ それはまた後で話しますよ。なぜウォーロックを開発したのかという問いにも、関連しますから。

ウォーロックの開発に踏み切ったのには、いくつか理由があります。

一つは、在り来たりなことですが、年端もいかない少女たちを死地に追いやることへの抵抗でした。

残念ながら私は男だ。魔力もないし、もう前線に出掛けられる歳でもない。こんな老いばれがきても、前線だつて迷惑でしょう？

それにきつと思いますよ。“老人まで戦いに駆り出すとは、人類はここまで追い詰められているのか”って。まあ、あの時期は物理的にも精神的にも、人類が追い詰められていたのは、否定しませんからね。

結局私がやっていったことは、若い前途ある少女たちを死地に追いやりながら、安全な場所で金勘定をするだけでした。

耐えられなかった。知っていますか？ 航空部隊の指揮官にはノイローゼになる者が多いのを。部下を戦場に送りながら自分は安全な後方で命令するだけ、というのは、それほどの心理的苦痛なのです。

しかし、私も老いたりとはいえ軍人なんです。これではいけないと思っていました。

それがウォーロックやコアコントロールシステムの開発に駆り立てたのですよ。

個人的な理由を挙げるなら、私の孫娘の一件です。私の孫娘は、ウィッチでした。ウィッチとして欧州で戦い、そして命を落としました。

全くの私の不手際だった。当時、私は第11戦闘機群司令官として、一九四一年だけで孫を含む五〇〇人のウィッチを死なせてしまった。あの子たちは今もまだ、ガリアの地に眠っています。たぶん本格的なガリアの復興が始まれば、遺骨も回収されるでしょう。本当にみんな可愛かった。優しくて……。本来なら戦場に立てるような子たちではなかった。

もちろん、私の孫もそうでしたよ。それが、私の家はウィッチの家系ではなかったのに、偶然にもウィッチの才能が発現したというだけで、戦場に引き出されて……。それでも、私は一人の軍人として、たとえ孫であっても、戦場に送り出すしかなかった。

孫の戦死報告を聞いた時、私はロンドンにいて何もできなかった。息子も息子の嫁も、愛娘を失って悲しみに打ちのめされました。

でも、それは私たち家族だけではありませんでした。あの頃は、墓地はいつも多くの人々で埋め尽くされ、すすり泣く声がそこら中から聞こえました。みんな、遺体のない空っぽの墓の前で、孫や娘や姉妹の死を悲しんでいましたよ。私の稚拙な指揮のせいで、多く

の人々を悲しませてしまった。

だからこそ、是が非でもウォーロックを開発して、これ以上悲しむ人が現れないようにしたかったのです。

三つ目の理由が、最初に述べた、戦後世界のイニシアチブを握るためです。

私はかねてより、人類はネウロイに勝利できると信じていました。そしてウォーロックと501JFW（501st Joint Fighter Wing）は見事にガリアを解放し、それが夢想ではないことを実証してくれました。

しかしこのネウロイとの戦争で、人類はすでに多くの犠牲を出しています。そしてネウロイを完全に打倒するには、また多くの人々が犠牲になるでしょう。

戦後の復興は容易ではありません。人類全体の労働力が不足しているのですから、おそらく、女性の社会進出は今以上に急速に進みますよ。

しかし、そうなると考えてもみてください。私たちは戦後復興を担うはずの、前途ある、それこそ無限の可能性を持つ少女を犠牲にしているのです。

たとえネウロイから欧州を解放しても、復興できないのでは、無意味ではないですか。

ブリタニアがイニシアチブを握るには、本来、少女たちを護らなければならぬ。しかし先に述べたように、私たち戦場に出ることはできません。犠牲を減らすには、無人兵器を投入するしかないのですよ。

長期的に見ればそれがブリタニアの、さらに言うなら世界のためではないでしょうか？

そして、ダウディング大將が、501JFWを創設しようと言い出した時、私は反対しました。“君はそんなことをして、また

多くの親を悲しませる気が”と。

私にはそれが許せなかった。阻止するにはウィッチに代わる、新たにネウロイに対抗する手段が必要でした。

ですが、そんな物はなかった。有効な代案を提示できないままJFW編成は進んでいく。代案もなく反対する私に対し、周りはそれを、権力闘争としか見てくれなかった。

そんな時だったのですよ。ネウロイが墜落し、無傷のコアが手に入ったと聞いたのは。

最初は、ネウロイの、新たな弱点を見つけるための研究でした。きっと魔法に頼らずともネウロイを破れるヒントがあるに違いないと思いました。だから、ウォーロックに転用しようというのは、この時点では考えていませんでした。

そして試行錯誤を繰り返していたある日、研究所の近くに、ネウロイの侵攻があったのです。

ウィッチが撃退しましたが、その時も二人の少女が命を落としました。ファラウェイランドで訓練を終え、配属されたばかりだったとか。

それはともかく、ネウロイが接近した時、コアが今までと全く違う反応を示したのです。解析した結果、ネウロイのコア同士が共鳴することを突き止めました。

その時初めて、あるいはこれを使えば、ネウロイを抑えられるかもしれないと思いましたよ。

ですが逆に我々が確保したコアが共鳴することを考えると、躊躇せざるを得ませんでした。

しかし、ある基地を訪れた時ですよ。

その基地はどこか？ それは言えませんが。クビ五分前とは言っても一応軍人なので機密は守らないと。記者は足が命でしょう？ どうしても知りたいのなら、自分でイングランドを駆け回って探してください。

とにかく、その基地でちょうどウィッチの脱走があつたのですよ。脱走した少女はすぐに捕まりました。戦場にいくのを嫌がり泣き叫ぶ少女を、屈強な兵士が羽交い締めにして引きずっていくんです。そして諦めて命令に従うまで監禁です。

ここだけの話、こういうことは、あちこちの基地で起きているんです。あの時は初めて現場を見て、衝撃を受けました。

もう、手段は選んでいられない。すぐに研究所に赴いて、コアコントロールシステムの開発を命じました。

予算については、ご指摘の通り、501JFWの予算を横領しました。ウォーロックが完成すれば、ウィッチーズは必要なくなりますからね。それに、ともに予算申請しても通りませんよ。まともな研究じゃないんだから。

君も記者なら知っているでしょう？ 航空省が海軍機開発に付けた予算の優柔不断さを。陸軍の戦車、歩行脚の生産開発予算もそうですね。我が国の、開戦時の戦車や歩行脚の保有量は、同じ島国でも扶桑の保有量の半分しかなかったんですから。我が国は予算の使い方が下手なんです。必要な予算を手に入れるのに、他に選択肢はありませんでした。

もちろん、これは犯罪です。しかし発覚しても私が責めを負えば済みます。それで未来を担う少女を救えるなら、安い買い物でしょう。

問題は、どうやってコアをネウロイに接触させるか、でした。それで当時、開発が頓挫しかけていた、無人兵器と掛け合わせたんです。見事に自立兵器として完成しましたよ。これなら安全にネウロイに接近できるし、仮に問題が起きても、強制停止させればいいし、何より誰も死なない。まあ、実際にはご存知の通り、コアが暴走し、ネウロイ化してしまいました。

その後の顛末は、あえて語る必要ありませんね。

そろそろいいでしょうか？ なんです？ まだ聞きたいことがあ

るんですか。

八月にあったトリスタン号の一件？ ああ、あの難民船ですね。ウォーロックのことと言い、トリビューン紙は501JFWに相当太いパイプを持っているんですね。

ええ、この際です、認めますよ。どうせもう後がないので。たしかに、501JFWがトリスタン号を救助するのを、阻止しようと思いました。

結局、それが軍人の、それも上級指揮官の宿命なんです。最前線の兵士は、目の前のことに集中すればいい。しかし、私の立場になると、命を天秤にかけなくてはならないんです。政治的に、軍事的に必要な命と不必要な命を選ばないといけない。

非人道的と言ったって、人道主義者はそもそも軍人になりませんよ。必要とあらば相手の意に反して命を奪う戦争行為が、そもそも非人道的なんですから。

結局、私は五〇人の難民の命より、一人のウィッチを優先しました。

知ってますか？ 救助活動中にウィッチーズの一部が二重遭難しかけたことを。あの天候ですから、未帰還者が出る危険性はありました。

ウィッチーズに死なれては困るのです。まだ、ウォーロックは完全ではなかった。結局、研究が完成するまでは、あれほど反対していたウィッチーズに頼る必要があったのです。

思ったんですよ。彼女たちを生かすためなら、五〇人ぐらいどうってことないじゃないか、と。

部下を五〇〇人死なせると、感覚が狂ってきますよ。五〇なんてそのたった一〇分の一なんですから。命なんて簡単に失われる、それほどに軽くて下らない物なんですよ。

え？ その下らない『命』を護るためにウォーロックを開発したんじゃないのかって？

ははは、たしかにそうですね。私にも人道主義のかけらぐらいは、

あるんですかね……。

501 JFWへの嫌がらせですか？ それも認めましょう。できるだけ早く、ウォーロックを量産する必要がありました。

我が軍は保守的な風潮が強いですからね。彼らにすっかりウィッチで十分、と思われては駄目です。だから前もって、ウィッチは必要ないということを、周囲に強調する必要がありました。

正式な予算がついて量産ラインが稼働すれば、こちらの物です。全てを公開し、ウィッチーズにも、貶めたことを謝罪するつもりでした。

空軍参謀総長の意向？ 関係ありませんよ。彼はウォーロックの研究を馬鹿にしてましたから。

さて、そろそろいいですかね？ いい加減切り上げないと、軍事法廷に遅れてしまうので。どうせろくな判決ではないでしょうが、遅刻しと逃亡扱いをうけるのは癪ですよ。軍人にとって、敵前逃亡は最大の屈辱ですから」

その後、彼は軍事法廷で銃殺という判決を受けた。

彼の主な罪状は報告義務違反、予算横領、独断先行であり、罪状に比しはるかに重い処分と言えた。

しかし彼が全ての責めを負ったため、ウォーロック、コアコントロールシステムの開発に携わった技術者は、あくまで命令に従ったのみとし処分を免れたが、最大でも一ヶ月の禁固という軽い処分で済んだ。

彼の遺志通り、研究は続けられた。

一九四五年六月、ヴェネツィア、ロマーニヤにおける攻勢で、人類は扶桑海軍戦艦大和にてコントロールシステムを運用し、大きな成果を上げている。

トレヴァー・マロニー空軍大将の人類に対する貢献は、多大な物

であつたと言えるだろう。

（後書き）

今回も、これまでと同じく、思いつきで書きました。

ストライクウィッチーズの二次創作なのウィッチは出てこない……。

この作品は、トレヴァー・マロニー大将のモデルであるトラフォー
ド・マロリー大将の人物評に、「部下から非常に慕われていた」「
人気取りに走ることはなかった。しかしいつも部下のことを気にか
けていた」「極めて野心的だが野心の実現のために日和見主義にな
ることはなかった」という物があり、それをベースに全くの妄想で
書き上げました。

史実のマロリー大将は当時五二歳、マロニー大将も同じだとすると、
孫がネウロイとの戦いで命を落としたという話は、少し無理があり
ます。

今回はインタビューの記録として、ほぼ全編をマロニー大将の台詞
としましたが、いかがだったでしょうか？

それではご感想お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3073r/>

とある大将の証言

2011年3月2日09時10分発行